

「アクティブ・ラーニング」

生徒が活躍する古典学習

長屋万里子

東京都立国際高等学校



1 もっと生徒が活動するには

授業は生徒のためにある。生徒の能力を伸ばし、できることを増やしたい。

しかし、そのための努力が、結果的に授業者の側だけの満足になってしまっていることがあるのではないか。「教師がたくさん勉強し、生徒はその成果を聞く」ということで終わらせるのではなく、もっと生徒が調べ、考え、そこから素朴な疑問をもつ機会を増やしたい。授業を通じて、生徒どうしの対話や、協力し、議論し合う機会を作りたい。

そのような思いから作ってきた授業について、振り返ってみよう。

2 予習の手順の「見える化」をする

対象となる一年生の必修クラスは、グループワークや発表などを通じて一・二学期に助動詞や用言などの文法事項を学び、文法書である程度のことは調べられるようになってきた。何度も調べたり書いたりすることで文法的なことを自然と身につけるために、三学期は演習に徹することにした。といっても高校生は多忙である。具体的な指示やフィードバックがなければ、生徒に学校外で古典を勉強する時間を作らせるのは難しい。そこで、予習の段階で、図1のようなプリントを出すことにした。

対象となる一年生の必修クラスは、グループワークや発表などを通じて一・二

学期に助動詞や用言などの文法事項を学び、文法書である程度のことは調べられるようになってきた。何度も調べたり書いたりすることで文法的なことを自然と

身につけるために、三学期は演習に徹することにした。といっても高校生は多忙

である。具体的な指示やフィードバックがなければ、生徒に学校外で古典を勉強する時間を作らせるのは難しい。そこで、

予習の段階で、図1のようなプリントを出すことにした。

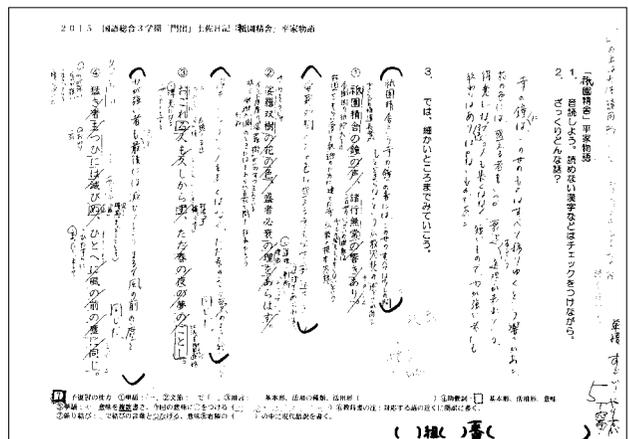


図1 予習用課題 (実際はカラープリント)

本文にきりのよいところで番号をふら、プリントの準備をする。

内容は以下の通り。

予復習の仕方 (学習の「見える化」)

① 単語…「二」

② 文節…青で「/」

③ 用言…緑 基本形、活用の種類、活用形 (動詞・形容詞・形容動詞)

④ 助動詞…青 基本形、活用形、意味

⑤ 単語・赤 意味を複数書き、今回の意味に○をつける（新出単語・わからなかった単語）

⑥ 教科書の注・対応する語の近くに簡潔に書く。

⑦ 係り結び・赤で結びの言葉とつなげる、意味を書く。

⑧ 右隣の（ ）の中に現代語訳を書く。

大体一枚のワークシートで教科書四行分程の文章である。生徒はこの予習を週一〜二回のペースで行うことになる。

国際科である本校は、さまざまな背景をもった生徒が混在しており、学力差が大きい。何をすればよいかわからない生徒のために、具体的な課題を出し、提出させ、毎回コメントや評価をもらうサイクルを試してみた。「この課題になってから勉強しやすい」と言ってくれる生徒もいるが、予習に一時間以上かかる生徒がいるという悩みもある。発展的に調べた事柄を空きスペースに書く生徒が出てきたときはうれしかった。

卒業までに、「課題だから勉強する」のではなく、「自分のために自発的に勉強する」姿勢を育てたい。「古典ができません、何をすればよいですか」と言わ

ある活動である。

生徒からの質問は三人以上でのみ受けつける。これは、最低三人で話し合い、それでもわからないところだけ質問しようというメッセージである。生徒から質問されると、うれしくてついついすぐ助けたくなる。しかしここでじつと耐える。いつもは話さないような生徒どうしが、議論しながら納得いくまで話し合えたときは、ガッツポーズである。

続いて「個人ワーク」を行う。

② 交流や調べ学習を通じて学んだことわかったことをまとめて書く。今日何を学んだか、自分でまとめさせ、学習の定着をねらう。

③ まだわからないところ、内容について疑問に思った点、古典の世界について調べたいと思ったことを書く。生徒どうしで理解を深めたいという疑問は、次の授業での生徒それぞれの到達目標になる。予習では文法中心だが、授業者が本当に大切にしているのは、古典の内容や世界に対するおもしろさを知り、知的好奇心をもつこと。したがって古典の世界について調べてみたいと思ったことも書かせる。

れたときは、先に述べた①〜⑧をできるところから進めさせたり、取りつきやすい本や漫画などを勧めたりしている。

単元のはじめには、「ざっくりどんな話かわかるところだけ書いてみよう」という問いかけをした。文法事項にこだわらず、わかるところだけをつないで全体の話の流れをつかむ癖がつけば、古典をより楽しめると思えるのである。

このように、どんな問いをどのタイミングで問いかけ、どんなフィードバックをしていくかによって、生徒の活動内容は変わる。だからこちらが理想の学習者像を生徒に伝え続けることが効果的だと思う。

実際は、この予習課題を友達に見せてもらったり、インターネットなどで答えを調べたりして写してくる生徒もいるが、それでもよいと考えるようになった。

3 すぐに答えを教えない

生徒どうしで比べ合う

同じ内容を話しても、生徒が「なぜだろう」と疑問をもった後に話すのと、ただ知識として伝えるのでは、理解に雲泥の差があると、一・二学期に行ったグループ学習からも実感した。

生徒たちからは、当時の武器や装束の種類、戦いの仕方や滅びの美学について（『木曾の最期』を扱ったときに出了）の疑問が出た。ここで書いた疑問が、単元が終わったときの調べ学習の課題になる。

4 講義も大事

次の授業からは講義もする。協働ワークシートを見て、生徒の理解度や疑問も把握できたので「これはC組の○○さんが出してくれた疑問だよ」とか、「ここはみんなわかっていたからさらっとやるね」などと説明するのに助かった。生徒に内容を聞いたり、単語の意味や文法的に特に押さえるべきことを聞いたりする。講義型で進んでいっても、予習と協働ワークで疑問が出てきているので、主体的に聞いてくれていく気がした。

5 必ず入れたい振り返りと

発展学習の機会

①〜③の手順で内容を生徒と確認し、深めたいところで、最後は感想や自分で気になったところを自由に調べ学習したレポート（ノート一ページ分くらい）を出して単元を終了した。「今まででいちば

それをふまえ、初回の授業で図2のような協働ワークを行った。

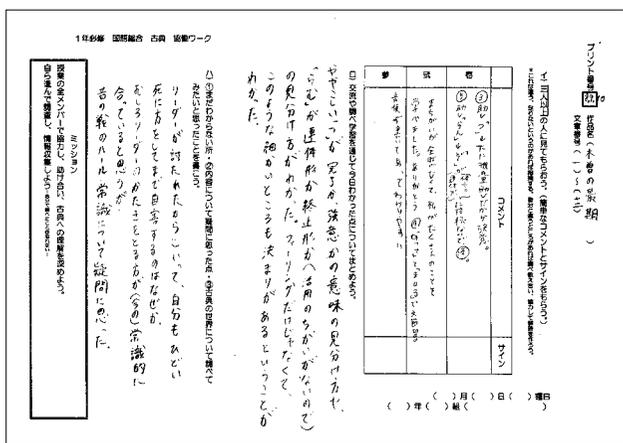


図2 協働ワークシート

まず、「グループワーク」を行う。

① 生徒は予習したワークシートの内容を三人の生徒と比べ合い、コメントとサインをもらう。違いがあればどちらがよいのか考える。生徒は辞書や文法書を開いて説明し合っていた。他人の予習を見て刺激されたり、教師の説明ではわかりにくい部分が生徒どうしで説明し合うことでわかったり、学びが

ん話がわかった」など、内容への興味を感じる感想も出て、負担は少なくないが、一定の学びがあった気がした。内容がわかったうえで疑問や調査が、生徒の知的好奇心を育てるきっかけになればうれしい。

6 おわりに

一年間、グループワークや発表を取り入れ、アクティブ・ラーニングとはこういうものだろう、と思うことに挑戦してきた。ただ、「これでいいのか」という疑問が消えないのが正直なところである。教師が何を「教えた」かではなく、生徒が何を「学び」、できるように「なった」かを成果とするのがアクティブ・ラーニングの立場だという。それを考えると、今回の実践には、生徒がどんな力をつけたのかを測る機会が少ないことに気がつく。授業の終わりに到達点を測る小テストを入れ、学んだことを表現する時間を取ると、生徒の到達点も見え、手応えや課題が見えるのかも知れない。古典好きな生徒を増やす授業をするために、試行錯誤を続けていきたい。